

第3回土地利用・景観部会の内容（要旨）

日時：平成30年11月28日14:00～

場所：飯田市役所A203・204号会議室

1 確認事項

(1) 第2回土地利用・景観部会の内容について

事務局より資料に基づき説明した。質疑応答なし。

2 協議事項

(1) 飯田市拠点集約連携型都市構造推進戦略（立地適正化計画）の検討について

- ・前回（9/20）第2回土地利用・景観部会において「立地適正化の方針」「区域の設定」の考え方を検討したことを踏まえ、修正を反映するとともに、計画策定の手順に従って「都市機能立地を図るべき施設」、「施策」及び「評価指標」の部分を検討した。
- ・改めて中心拠点、広域交通拠点、地域拠点及び交流拠点の役割を確認するため、「全市民のための拠点」と「周辺住民のための拠点」に整理し、都市機能集積区域に設定すべき区域は「全市民のための拠点」の中心拠点と広域交通拠点に、地域機能集積区域に設定すべき区域は「周辺住民のための拠点」の地域拠点とした。橋北、橋南及び東野については地域拠点として他の地域拠点と対等な位置づけであることを整理した。
- ・特に、地域機能集積区域は、制度上の区域設定は行わず、将来的に検討・計画する区域としており、この計画が、市内20地区の地域自治の取組と関連し、基本構想や地域土地利用方針の運用に対する働きかけとなる位置づけとなることを確認した。
- ・「都市機能立地を図るべき施設」については、高次都市施設として介護・福祉、子育て、医療、教育は全市民のための都市機能として利用し得る施設を掲げた。
- ・「施策」については、届出制度、国等の予算措置、税制、都市計画、公共交通などの分野に関する施策を活用することを提案し、それぞれの分野ごとの内容を確認した。
- ・「評価指標」については、施策の分野ごとに想定される目標について、現状で考えられる指標値を提案した。
- ・特に、人口目標の設定については、生活利便区域内の2040年の将来予測は▲23.1%で、区域内の人口を現在と同程度とするならば、ある程度の人口の押し上げが必要となり、人口ビジョンの整合を考慮した場合、2040年の飯田市の人口ビジョンで押し上げるとされている25,217人の約半分を区域内で押し上げる必要がある。

(2) 意見交換

協議事項の説明を踏まえて、委員と幹事により意見交換を行った。主な意見は次のとおり。

ア 都市機能と人口目標について【上原委員】

- ・都市機能集積区域の都市機能については、リニア駅周辺には魅力発信施設を立地するという考え方があるが、中心市街地の人口減少や空洞化の不安があり、かつ、リニア駅と中心市街地が離れている状況の中で、過度にリニア駅周辺の誘導施設を絞り込むことにより、両拠点（中心拠点と広域交通拠点）の都市機能集積区域が共倒れになる心配もある。
- ・ロンドンのパンクラス駅の例では、駅周辺に公園が整備され、居住というより交流の拠

点の雰囲気があり、リニア駅周辺でも同様の考え方ができないか。

- ・飯田市に滞在する人がどこで時間を過ごすのかということを考え、単純に人口を目標値とするより、交流など別の視点で捉える仕組みで目標値を設定できないか。

→広域交通拠点に近接した場所に「産業振興の拠点」が整備されつつあり、信州大学の研究開発の拠点、或いは地域産業を育成する拠点として整備されてきている。リニア整備区域内ではないが、産業振興の拠点になるような場所があり、まち・ひと・しごと創生の動きに関わる場所で、重点的な取組に位置づけられる施設もある。全員が中心市街地に住まなければいけないということではなく、広域交通拠点の周辺にも取組が行われている場所があり、広域交通拠点を有効に利用することも想定される。【野村総合研究所 小林】

→人口が減少することは抑えられないが、どこまで押し上げることができるのが課題で、押し上げ部分を担う施策として立地適正化計画が大きく関わってくる。地域拠点は、段階的に集積を検討していく区域だとすると、2つの拠点（中心拠点と広域交通拠点）が担う役割が大きい。【北沢リニア推進部長】

→立地適正化計画の基本は、まち・ひと・しごと創生の取組で、人口流入を期待する部分もあるが、集約した区域の密度が高まるということである。居住誘導区域を目指すということは、その人口密度が高まることにより将来的に区域が持続できるという計画なので、人口減少する中で、面積がそのままでは密度は維持できない。リニア中央新幹線も重要だが、そこは本質ではないことに留意しないといけない。【浅野部会長】

イ 滞留と流動の考え方【上原委員】

- ・滞留は縛られるイメージがあるし、流動は出ていってしまうイメージもある。前向きな捉え方の議論ができるとよいのではないか。
- ・中心拠点は「都市的な生活で産業・文化が混じる」のようなイメージで、地域拠点は「田園型の生活」で、広域交通拠点は「都市と田園を結ぶ交流の扉」のようなイメージではないか。

→「賑わいを生み出す」というテーマで考えると、「座って、飲んで、食べて、話す」ということだと思う。歩行者数ということではなく、アクティビティと掛け合わせて質が上がるような指標の設定も考えられる。【浅野部会長】

ウ 災害危険区域等と区域設定の考え方【上原委員】

- ・伊那谷の段丘林は、眺望、景観的にも信州・長野の魅力である。飯田市は、段丘崖や谷地形が多く災害の危険性も増加するが、災害の危険のある区域を単に除外するだけでなく、積極的の地域の緑や保全すべき景観という考え方をもち、地域の価値として捉える考え方もあり得るのではないか。

→制度上の立地適正化計画は、二次元的な都市像を想定しているので、飯田市のように段丘があり立体的な都市には馴染みづらい計画である。ご意見のとおり、災害危険区域等の除外を理由として、本来の目的である都市縮小に向けた取組であること前面に打ち出すべき。さらに災害危険区域等で除外した区域は、緑や景観の場所として前向きに捉え、将来の暮らしの質を高めるような方向に活用していくというのが飯田市の基本的な議論となる。【浅野部会長】

→他の自治体の立地適正化計画は、既存の便利なところを設定するだけになる。さらに

水害や危険な場所でもどうしても設定する必要があって設定してしまう。逆に、飯田市が災害の危険のある場所は設定せず、そこに暮らすと安心だということと、かつ、東京・名古屋とのつながりがある都市的な生活ができる地域だということを前向きに捉えている。【上原委員】

エ バス路線について【浅野部会長】

- ・バスの基幹路線など重視しているが、地域公共交通網形成計画をバックアップする計画となっているか。飯田市が守っていく路線として意思表示していくのであればよいが。→現行のバス路線だけではなくて、今後の検討は必要と認識している。飯田市だけではなく、広域で考えないと難しい部分もある。今必要な路線は想定することはできるが、路線バスなのか、或いは新たなモビリティなのか時間をかけて検討する部分がある。【小平建設部長】

オ 地域拠点の段階的な検討【浅野部会長】

- ・飯田市の特徴的な部分として、地域機能集積区域を段階的に設定していくことに関して、地域拠点の地域住民が主体となって計画の醸成を図っていくということは、今後の展開として期待できる。
- ・この計画にあるデータが地域住民の議論を活性化させるという趣旨であり、是非、そのような取組として進めてほしい。
- ・ただし、空間に計画を落とし込むという今回の内容は、地域住民の理解を得るという課題があるので、計画に記載して終わりではなく、具体的に進めていくことが大事。→地区で検討された部分を飯田市の計画として反映できるものとして地域別方針の形式となっている。地区で検討する際には、市職員が必ず関わらせていただき、検討の作業を支援させていただくこととしている。現在、3地区で具体的な計画ができあがりつつあり、それがモデルとなっていく。この取組を広げていけば、地域都市機能集積区域の考え方が成り立つと考えている。【松平土地利用計画係長】

カ 中心市街地に集積させることの方針【浅野部会長】

- ・リニア駅の議論は数年後の想定なので、勿論中心的な議論なるが、都市機能や居住の集積と混在した議論に注意が必要である。二段構えの検討となるのではないか。
 - ・飯田市は、地形的な制約で集約する部分は相当集約されている。集まるところに集まるので、中心拠点の部分は比較的大丈夫だと思う。空き地ができたとき、受け皿として活用される。
 - ・一方で、リニア時代には、周辺の地域の人口減少が現在より進んでいるとすると、周辺の地域の空き地があれば、そこに暮らす人が増えるという事例が増えるのではないか。→中心拠点への都市機能の集積は、自然な流れとして認識している。また、中心市街地とリニア周辺の2つの区域を基本に置き、災害危険区域を除き、用途地域内を基本として生活利便区域を設定する方針とする。山里街の暮らしの「街」は、中心市街地を想定するが、すべて中心市街地に寄せるということではなく、山里街の暮らしという全体の政策の中で、街の部分を立地適正化計画制度で考えていくものとした。リニア関連の方針や計画の中でも、そのような検討がされてきた経緯がある。【遠山地域計画課長】
- リニア関連の議論もあるが、飯田市に暮らしている人が便利で利用しやすい場所とい

うことであれば問題ない。リニア駅にあった方が利便性が増す、或いはその方が相乗効果が期待できるプランあれば、そちらの方針もあててもいいのではないかと感じた。

【上原委員】

→地域拠点の区分の中に、橋北、橋南、東野という地区があるが、中心拠点でありながら、地域拠点でもある。つまり、地域拠点として見つつ、都市機能としてみれば一体としての中心拠点となっている。そのような状況の中で、都市全体の機能を担ってきた場所として、価値を持たせていきたい場所と考えている。**【遠山地域計画課長】**

→その考え方は非常によく分かるが、そのための施策の部分が打ち出せていない。今後起こり得る事象や、変化に対応していける計画であることが重要。**【浅野部会長】**

ク その他**【意見多数】**

- ・計画の題名については、市民に分かりやすい計画名に変更した方がよい。

3 今後について

次回予定 平成30年12月26日。別途通知のうえ開催する。